2月5日

日本の殉教者

日本二六聖人殉教者

(1597)

～日本で殉教した人たち～

日本聖公会では「日本の殉教者」を祝うこの日に、カトリック教会では「日本二六聖人殉教者」を記念します。それはこの日に長崎で26聖人が十字架につけられたためです。ここでは、1549年にフランシスコ・ザビエルによってキリスト教が日本に入って来てから、約半世紀後に起こったこの出来事をご紹介します。

その当時の将軍、豊臣秀吉は、最初はキリスト教に反対しませんでしたが、九州征伐の時にその態度を変えます。1587 年には宣教師追放令を発布し、宣教師たちを国外追放していきます。また、大坂・堺・京都の教会を次々と破壊します。一説にはその数は、9年間で140にのぼったと言われます。

日本にはその頃、59人の司祭と97人の修道士がいました。また日本人修道士も66人いました。さらに信者の数は15万人とも30万人とも言われています。

しかし、1596年におこったサン・フェリペ号事件をきっかけに、秀吉は、宣教師はおろか、信者さえも全員死刑にするという考えを持ちます。この考えは石田光成によって一度改められましたが、やはり処刑をするという決断に至ります。

「二六聖人の殉教」

当初処刑の対象に選ばれたのは、フランシスコ会宣教師6名、日本人のイエズス会士3名、信者15名の計24名でした。そしてその中には12歳～14歳の少年3名も含まれていました。

1597年1月3日、彼らは京都で左の耳たぶを切られ、京都市中を引き回され、見世物にされます。そして1月4日に京都を出発から1か月にわたって、長崎まで1200km もの道のりを歩きます。その間、殉教者の世話をしていた信者2名も一行に加わり、26名が長崎の西坂に到着します。

長崎奉行はせめて3人の子どもだけでも救いたいと考えますが、最年少のルドビコ茨木は「この世のはかない命より、永遠の命を望みます」と答え、26人は十字架上で天に召されていきます。

＜特祷＞

全能の神よ、あなたの慈しみと力とにより、わたしたちの国の殉教者たちは、苦難に打ち勝ち、死に至るまで忠実な生涯を送りました。今その人びとの生涯を記念し主のみ業を感謝するわたしたちも、この世においてあなたを忠実に証し、殉教者たちとともに命の冠を受けることができますように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン